本づくり六十余年
101歳，本邦皆既日食を夢見て

阿　部　　昭

〈星の手帖社　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-15-8　佐一代々木ビル〉
e-mail: starbook@sea.plala.or.jp

2024年3月11日，日本天文学会天文教育普及賞を受賞いたしました．受賞にあたりまして，『星の手帖』創刊から休刊までの紆余曲折，編集者としての経験や天文に関わる人々とのつながりなどに触れながら，本づくりに奔走した六十余年を振り返ります．

編集者人生スタート

この度の天文学会2023年度「天文教育普及賞」の受賞は，60有余年の編集者生活の中での最高の栄誉と，感謝しております．

想い起こすと，小学生の頃からラジオの組立に夢中になり，将来は電波科学を勉強しようと思い，高校に入学するも，1年生終わりの春先，突然の父親の死に遭い，なぜか文学に傾倒．以後，数字の世界から言葉の世界へ身を置くことになりました．大学ではフランス文学を学び，卒業はしたものの，当時は大の就職難．やむを得ず小さな出版社の翻訳を主とした仕事に就きましたが，すぐに倒産．その後，工学関連の仏語資料の翻訳で生活の糧を得ながら，やっと新聞広告の応募で学習研究社の百科辞典編集部に定職を得たのが28歳．本格的な編集者生活のスタートでした．

藤井旭さんとの出会い

百科事典の自然科学部門の編集に携わり，多くの科学者や技術者の方々への執筆依頼や原稿受け取りなどに追われる毎日でしたが，百科事典の仕事も終わり，「高一コース」という月刊誌の編集部に移籍．生活スタイルが激変し，連載の小説や漫画の担当で，作家や絵描さん，芸能人，果ては占い記事で易者さんとまで付き合い，残業徹夜の毎日．ここで出会ったのが，かの藤井旭さんでした．当時，藤井旭さんは美大の学生で，アルバイトで「高一コース」のグラビアページのレイアウトを手伝っていたのです．

ある年の夏の号で，「今年の女性水着ファッション」なるカラー・ページの企画を提案し，私が記事作成を担当しました．当時はカラーグラビア・ページは雑誌の花形，私は有名水着メーカーから最新の水着を提供してもらい，モデル派遣会社に行き，高校生好みのモデルを派遣してもらいました．特別にスタジオを借り，モデルにその水着を着てもらってカメラマンが撮影したあと，写真原稿を藤井さんに渡し，グラビア紙面のレイアウトをお願いしました．

その後，レイアウトを藤井さんが持ってきました．当時はコンピュータなどはありませんから，すべて手描きのラフスケッチで，その指示に従って版下を制作，編集長に提出し，OKをもらって製版に入り，校正ゲラが出稿されます．

さて，藤井さんのレイアウトデザインを見てびっくり．水着の特集ですから，当然，可愛いモデルさんが色とりどりの水着をつけ格好よく登

場！と思いきや，紙面にあったのは，海草などあしらったイラストを背景にして，モデルが着て身体の線が浮き上がった水着の切り抜き写真の乱舞でした．確かに素晴らしいデザインです．でも，モデルの可愛い子ちゃんの顔も手も足も見えません．編集長に相談すると，「なかなか面白いけれど，派遣モデル会社がOKしないぞ，了解を取れ」との指示．なんとかモデル派遣会社の了解を取りつけ，印刷，発売．結果は，結構評判もよく，その後も藤井さんはアルバイトを続けることができました．こんな事件がきっかけで藤井さんと仲良くなり，彼が星マニアなどとはつゆ知らず，共に釣り好きで，海釣りなどを楽しんでいました．

編集屋人生の勲章

その後，藤井さんは美大を卒業．デザイン会社の仕事に就き，交友が途絶えました．私の方も40歳近くになり，雑誌編集も辛くなり始めた頃，河出書房新社から，「科学関連図書の編集部を新設したいので，キャップとしてこないか」とのお誘いがありました．本来の自然科学好きが頭を持ち上げ，友人達から「河出は経営状態がよくないぞ…，やめとけ」の声もありましたが，転職を決めました．

案の定，入社後3ヵ月も経たない，新設科学編集部の部長の辞令も出ないうちに，河出書房新社が倒産．てんやわんやの中，倒産経験の深い？経歴を見込まれ，いつの間にか科学編集部部長どころか会社更生法下の労働組合委員長に祭り上げられ，毎月，会社側の管財人と経営状態の経過報告に地方裁判所に出頭するようなことになってしまいました．

その後，2年も経たないうちに，幸いに会社は立ち直り，無事に会社更生法を卒業．同時に私も科学編集部の部長を飛び越え取締役となり，会社経営に就くことになりました．それも本職の編集担当でなく，営業・労務担当取締役です．

営業担当役員として全国の大手書店さんとのお付き合いや，東販・日販など書籍取次会社の人たちとのお付き合いの毎日．ところが，私の方は会社役員よりも根っからの本作り屋です．それに，学研の百科事典編集部時代からの科学関係の先生方とのお付き合いもあります．フラストレーションのたまる毎日が続きました．そのような日々から再び燭光が見えたのが，かの藤井さんとの再会です．

ある日，藤井さんが郡山から上京し，駿河台下にあった河出書房新社に来社しました．「こんな本を出しましたので…」と差し出された本を見てびっくり，『天体写真の写し方』とタイトルにありました．

「えっ，藤井さん，天体写真など撮っていたの？」おかしな絵を描くイラストレーターとばかり思っていた私はびっくり仰天．無理もありません，前述の水着の件もあり，その日も藤井さんは，講談社の雑誌の連載「へんな学校」の挿し絵のイラストが締め切りに間に合わないので，絵を描く場所を急遽借りにきたのでした．疎遠だった間の藤井さんの話に花が咲き，彼が山口での高校時代から天文部部長として活躍したものの，大学受験では天文学を選ぶか，絵描きになるか，悩んだ末のイラストレーターへの道だったことを知りました．福島県の郡山に移住したのも，磐梯山山麓の星空の美しさに魅せられてのことと知り，改めて天文ファン，天体写真家藤井旭との交友が再出発したのでした．

ここから，自然科学・技術を中心にノンフィクションの企画編集者だった私は，天文学者，そして全国の天文ファンとの交友が始まりました．もちろん天文学の本も出版し始めました．河出書房でも，古くは萩原雄祐先生の『天体力学』など，天文学図書の出版は初めてではありませんでしたが，一般啓蒙書としての出版は，私の企画した村山定男・藤井旭共著の『天文学への招待』が初めてでした．藤井さんの素晴らしい写真を，と言っ

ても当時はモノクロ写真が主でしたが，ふんだんに掲載．村山先生の独特の優しい語り口の解説．組み上がってきた校正ゲラを見て妙に自信がつき，初版発売部数は当時の自然科学書籍では破格の1万部を営業部に主張し，「必ず売れる．売れないときは全国売り歩く」などと頑張り，強気で実現しました．

さて，1969年の12月20日，無事に初版発行，発売開始したものの，倒産後の会社立て直し中のことで，十分な広告はできません．倒産時に営業部の新入社員だった若手が応援してくれるも，発売1ヵ月後の成績は最悪，早くも返品が始まります．藤井さんにも早速，経過を報告したところ，「もう少し我慢だよ，阿部さん，全国の天文ファンが応援してくれるよ」との御託宣を受けました．

その言葉通り，苦節半年，翌年の6月には重版が決まりました．これには応援してくれた若手営業部の人たちも大喜び．しかもそれからも，その年の12月には第3版，翌年6月には第4版が出て，その後半年ごとに増刷が続き，第13版まで行きました．さらに，1975年の8月には新版発行．この時期から藤井さんのカラー写真も増えました．新版も1982年2月の第14刷りまで増刷が続き，1983年12月には新装改訂版が出ます．さらには1998年7月の『ヴィジュアル版天文学への招待』発行と，空前のロングセラーとなりました．

当然，天文学入門書に自信をつけた私は，矢継ぎ早に村山・藤井コンビの天文入門書を企画，刊行しました．先の『天文学への招待』を含め『星座への招待』『宇宙への招待』の3部作を刊行．いずれも好評で，安定した重版を続けました．もちろん私も，この成果を土台に「アストロ・ライブラリー」なる天文叢書のシリーズを企画するなど，天文書の分野を広げました．

この間，好奇心の塊とも言える「編集者根性」は失わず，天文書だけでなく，SMSG数学入門書の翻訳シリーズ，現代科学撰書，科学技術シリーズなどを手掛けます．さらには数学のトポロジー

図1　1978年，『星の手帖』創刊号の編集会議．左から村山定男，小尾信彌，古在由秀，阿部昭（手前）

の権威，早稲田大学の野口広先生と知り合い，世界のあやとりを紹介した『あやとり』シリーズを超ベストセラーとしました．自身も「大きな星」「天の川」など，星をテーマにした世界のあやとりをテレビなどで実演披露したこともあります．万事順風満帆．そこで，天文書で好評を得た成果をもとに，かつて藤井さんと出会った頃の雑誌への執着もあり，当時発展著しい「パソコン」（もっとも当時は「マイコン」の方が通りがよかったのですが）に目をつけ，コンピューター入門者向けの新雑誌を企画します．同時に，新しい天文雑誌の刊行にも興味を惹かれていました．

しかし，この頃から再び河出書房新社の経営は徐々に悪化します．そのような状況下，とにもかくにも天文学招待シリーズの好評もあり，新雑誌は天文関係に決定したのです．そこで藤井旭さんと，新雑誌についていろいろ相談しました．従来の天文雑誌にはなかった天文学研究の最前線の鼓動を天文ファンに伝える，少々難解でもよい，同時に，多くの青少年に星空に親しんでほしい，そんな目的にかなう雑誌を創ろうと…….

結果，とにかく新雑誌の編集委員と話し合ってこの趣旨に沿うような先生方の指導を仰ごうということになり，以前からお世話になっていた国立科学博物館の村山定男先生，東京大学の小尾信彌先生，当時東京天文台の天体捜索部部長の古在由秀先生，それに既に天体写真家として世界的に名声を得ていた藤井旭さんの4人を監修者にお願いしました（図1）．発行形態は，当時の河出書房新社の台所事情もあり年4回刊行の季刊誌とし，雑誌の

図2　『星の手帖』創刊号の表紙.

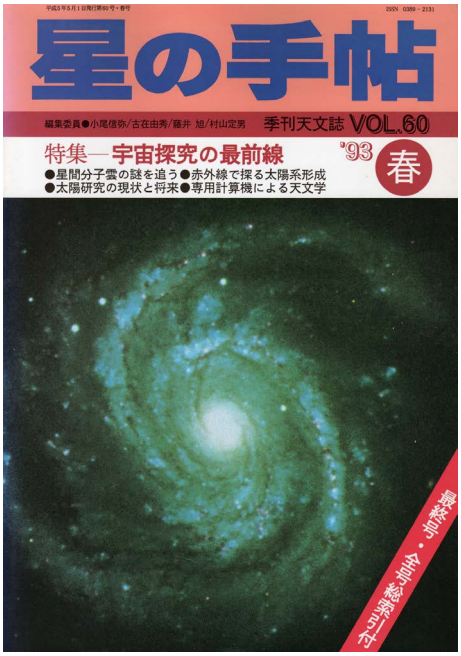

図3　『星の手帖』60号で一旦休刊.

タイトルは『星の手帖』と命名しました（図2）.

さらに「星の手帖」本誌の発行の傍ら，先に述べた「天文学への招待」シリーズの好評から，天文学啓蒙書シリーズを積極的に企画.『アストロ・ライブラリー』をはじめ，『星日記』『星空ごよみ』なども企画，刊行．従来は文芸書出版社の河出書房新社の中で，孤軍奮闘状態でした．しかし，天は味方せず，再び本家の河出書房新社の台所事情が悪化，同時に『星の手帖』本誌の売れ行きも下降線を辿り始めました.

ついに28号発行を迎える頃には，河出書房新社が「あわや再び倒産！」の危機に直面します．私51歳の春，倒産危機の役員としての責任を取って河出書房新社を辞し，株式会社星の手帖社を設立し，『星の手帖』の自力での刊行続行を決意します.「親方日の丸」の環境から一変，毎月資金ぐりに頭を悩まし，『星の手帖』本誌の組版を自分で制作するなど，経費節減，人員削減など，悪戦苦闘するも，やはり天は味方せず．書籍取次の東販・日販は前号の売り上げ，返品率を見て，「今度の特集は面白く絶対に売れます」と強調しても，取扱部数を減らしていきます．まさに負のスパイラルに陥り，ついに1993年，創刊から15年，60号を迎えたところで一旦終焉せざるを得なくなりました（図3）.

天文グッズを主力に101歳まで

『星の手帖』休刊を決意した時，私はすでに60歳．引退も考えましたが，書籍作りの合い間に制作・販売していました「古星図絵葉書」「天体ポスター」「天体下敷き」「星座早見」など，いわゆる「天文関連グッズ」が全国のプラネタリウムや科学館の売店で売れるようになりました．さらに以前から構想を練ってきた「組立望遠鏡」が大ヒットし，特許も取得．学校教材としても一括採用されるようになりました.

これなら，なんとか会社を存続し，若い人たちを誘って『星の手帖』の復刊も……．そんな夢が浮かぶような時期も束の間，まさに「好事魔多し」で，近年のコロナ旋風の影響を受けて全国科

図4　星の手帖社を支える大ヒット商品となった組み立て天体望遠鏡.

学館・プラネタリウムは長期休館，売り上げは急降下しました．追い討ちをかけるように，私の身体にも異常が続発．70歳まで入院経験のなかった私の身体が，胆嚢切除を皮切りに，薬品アナフィラキシー，コロナ罹患，ペースメーカー挿入，尿道癌，左腎臓切除と続き，この原稿を書いているのも十二指腸潰瘍・肝臓一部切除の手術の合い間です．

しかし，90歳の誕生日を迎え，75キロあった体重が60キロを切るようになるも，「本が売れないのなら，文具を主力に天文関連消耗品を企画しよう」，そして「なんとか全国の天文ファンとの繋がりを続けよう」との意欲は衰えず，手術前の病床にあって，来年の『星空ごよみ2025』の原稿を書いています．

とにかく「本州を横断する2035年の皆既日食を見るまでは……」と．まさに老醜，初めて見た1970年のメキシコ皆既日食のコロナの輝き，あの感動をもう一度，最後に日本で……．101歳．皆さん，その節はよろしく．